

42 橋本病発見者 橋本策（はかる） 補遺

佐藤 裕

「橋本病」は、日本人の名前が冠名として残る数少ない医学用語の一つであり、戦後九大第一外科の秋田八年氏の貢献により世に知られるようになった（秋田八年著、橋本氏病—その提唱者の面影と概要—、臨床の日本…第3巻6号、pp417—421、昭和32年）が、その後の出版をみると、報告者「橋本策（はかる）」の人物像とその業績については、正しく伝えられているとは言えない。また、橋本策に「特異な組織像を呈する」甲状腺疾患の研究を命じた三宅速（はやり）に関しても、あまり言及されていない。そこで、橋本策の同門として、橋本策の人物像と三宅速の貢献を紹介する。

橋本策は、明治14年5月5日に三重県阿山郡西柘植村御代において、医師橋本謙之助の三男として生まれた。

橋本家は伊賀地方で代々続く医家であり、祖父は幕末に

長崎においてポンペ（Pompe）の教えを受けた蘭方外科医であった。地元の尋常小学校を卒業後、津中学から第三高等学校を経て、明治37年新設の京都帝国大学福岡医科大学に入学した。明治41年1月卒業と同時に、三宅外科に赤岩八郎（後の第一外科二代目教授）らとともに入局した。助手時代に、教室に保存してあった甲状腺標本の組織学的研究を命じられ、3症例について詳細に研究し、明治44年の第12回日本外科学会において「甲状腺ノ淋巴腫様変化ニ関スル組織的並ニ臨床的知見ニ就イテ」と題して発表した。演題抄録は「余ガ茲ニ甲状腺ノ淋巴腫様変化ト称スルハ甲状腺トシテ手術剔出セル甲状腺組織内ニ恰モ淋巴腺若クハ消化器系統ノ臓器等ニ生理的ニ存在シ病理的ニ増殖スル性質ヲ有スル淋巴濾胞数多存在スルヲ認め且ツ甲状腺実質ニモ一定ノ変化ヲ伴イタルモノナリ」で始まっているのである。翌一九一二年もう一例を追加して「Langenbeck's Archiv für Klinische Chirurgie」誌に「Zur Kenntnis der lymphomatösen Veränderung der Schilddrüse (Struma lymphomatosa)」と題して発表した。この論文を読んできくと、特異な組織

像を呈する甲状腺腫の研究の端緒は三宅速にあることが明言されている。三宅速自身がそれまでに摘出保存していた甲状腺標本の中に、「特異な組織像を呈する」ものがあることから、この病態の解明を橋本策に命じたのである。また、この特異な甲状腺腫に着眼した三宅速の「慧眼」は、ミクリッツに師事したことにその淵源があると考えられる。すなわち、「ミクリッツ病(リンパ球浸潤を伴って唾液腺や涙腺が硬化肥大する疾患で、一八八八年に M. Kulicz が記載)」を報告したミクリッツに師事した三宅速は、この疾患のことが念頭にあり、摘出保存していた「著明なリンパ球浸潤やリンパ濾胞の形成を伴った甲状腺腫」の研究を、橋本策に命じたのである。この論文は「橋本策」の単名で発表されており、実際に研究の端緒をつくった三宅速の名前は、主著者「Dr. H. Hashimoto」の下に小さく「Director: Prof. H. Miyake」とあるのみである。近年三宅速の日記をもとに孫の三宅進氏が刊行した「或る明治外科医のメモランダム 九大医学部播籠期 三宅速記」には、橋本策が論文発表した「リンパ腫性甲状腺腫」がドイツ医学界においても正式に認知され

たことを喜んだ記述が見られるのである。

一九一二年二月ドイツの Göttingen 大学に留学した Kaufmann 教授のもとで尿路結核の研究を続けたが、第一次世界大戦のため3年足らずで帰国した。第一外科を経て、35歳時に故郷伊賀で開業し盛業をきわめていたが、不幸にして昭和九年一月九日、陽チフスのため急逝した(享年54歳)。

現在、秋田八年氏と地元阿山郡医師会の尽力により、伊賀町中央公民館の敷地内に橋本策の胸像顕彰碑が建てられている(碑銘は、三宅連の後を嗣いで、第一外科の四代目教授となった速の長男故三宅博氏の手によるものである)。

(北九州市立若松病院)